

あゝ出子

ポリオ・プラスのツネさんとミネさん



東京麹町ロータリークラブ

復刻に寄せて

わが東京麹町ロータリークラブは2018年6月17日をもって創立50周年の大きな節目を迎えます。

この50年間の中で、わがクラブが世界に誇れる最大の活動は、山田彝、峰英二両会員が身命を賭して自ら活動を始め、その尽力の結果RIの最重要活動に至ったエンド・ポリオでした。

エンド・ポリオも終局に至った現在、両会員の人となりを十分に知ることができる本書を復刻し、より多くのロータリアンの皆様にお読みいただければと存じます。

2016年4月

東京麹町ロータリークラブ

2015-2016 会長 地 引 恒 夫

50周年記念実行委員会

委員長 木 元 尚 男

同ポリオ担当委員会

委員長 藤 谷 護 人

同記念誌担当委員会

委員長 莊 村 明 彦

想　　い　　出　　草

ポリオ・プラスのツネさんとミネさん

目	次	頁
・山田彝・峰英二両会員の思い出集出版について		3
・山田　彝会員のプロフィール		5
・峰　英二会員のプロフィール		7
・「山田・峰社会奉仕賞」のしおり		9
山田・峰社会奉仕賞について		

第1部（クラブ外編・順不同・敬称略）

1. 山田さんの書簡から	1984~85年度地区がけ- 東京城北RC	近藤正夫	11
2. 山田さんを思う	1992~93年度地区がけ- 那覇西RC	松島寛容	21
3. ツネさんのこと	1984~85年度地区幹事 東京練馬西RC	戸田一誠	24
4. 南インドに陽がさして	1992~93年度地区幹事 那覇西RC	大宜見　齋	27
5. ツネさんの思い出	日本オメガス委員長代行 東京南RC	松阪麻樹生	33
6. テディーの思い出	グアムTUMONBAY RC	FRED ESTABROOK	35
7. 人間 山田　彝	地区研修リーダー 田無げやきRC	指田勢郎	38
8. 山田彝さんを知る一人として	クラブ幹事 那覇東RC	安澄文興	41
9. 山田彝様のこと	旧制東京高校学友夫人	田村友枝	43
10. 山田さん・峰先生を思い出して	東京千代田RAC OB	平田幸彦	45
11. 峰先生と私達RACとの出会い	東京千代田RAC OB	甲斐志権	50
12. 峰先生を偲んで	東京千代田RAC OB	武山玲子	52

第2部 (クラブ内編・順不同・敬称略)

1. 山田・峰会員	1968. 6.17	チャーターメンバー	権田良彦	55
2. 彝さんのこと	1968. 6.17	チャーターメンバー	今中祝雄	57
3. 偲ぶ草	1968. 6.17	チャーターメンバー	阿部敬二	59
4. 故・山田彝会員、峰英二会員回想	1968.10.28	入会会員	有山房雄	62
5. 山田 彝大人を偲ぶ	1969. 3.10	入会会員	新庄勝助	64
6. 山田 彝君のこと	1970. 1. 2	入会会員	網野 誠	66
7. 山田彝さんと峰英二さんの思い出	1970.10.15	入会会員	新村重晴	69
8. 奉仕に散った先達を偲んで	1970.10.15	入会会員	久木野利光	71
9. ツネさんを偲ぶ	1971. 5.12	入会会員	中分 亨	74
10. 故山田・峰両会員に捧げる	1972. 3. 6	入会会員	山下寛一郎	78
11. 彝先生との出会い	1972. 4.17	入会会員	齋藤純生	79
12. ツネさん、峰先生と私	1973. 1.18	入会会員	藤井吉兵衛	82
13. 亡き友のおもかげしのぶ花ふぶき	1973. 2.24	入会会員	垣見尚二郎	96
14. 会者定離 山田彝さん追想の記	1974. 2.25	入会会員	鈴木清二	97
15. ツネさんとミネさん	1975. 5.10	入会会員	渡邊貞治	100
16. 山田・峰両先輩の思い出	1975.10.20	入会会員	遠矢洋二	102
17. 拜啓 山田彝様・峰英二様	1978. 1.30	入会会員	中川 淳	104
18. 山田兄・峰兄再謹表示哀悼	1981.10.12	入会会員	早川健一	107
19. 山田・峰両兄 追悼	1982.11. 8	入会会員	園田和朗	108
20. 山田ツネさんの思い出	1984. 1. 9	入会会員	黒沢亮平	110
21. ポリオ・プラスで思う事	1986.12.15	入会会員	飯嶋庸夫	112
22. 素晴らしきお二方を偲んで		事務局員	鶴田和子	114
23. 思い出の中から		エレクトーン奏者	志村千陽	117

山田 彝・峰 英二両会員 想い出集出版について

1993～1994年度

東京麴町RC会長 渡邊 貞 治
東京麴町RC社会奉仕委員長 中 川 淳

不歸の客となられた山田・峰両氏に先ずは謹んで哀悼の意を捧げます。両氏はロータリーポリオプラスのため身を挺してご尽力され、また度重なるインド訪問にて活躍されましたが、相次いでご逝去され、ご遺族・知人はもとより我々ロータリアンにとりまして哀毀骨立の念に打たれるしだいです。

当クラブでは、両氏の功績を称え、地域社会に著しく奉仕された団体に山田・峰社会奉仕賞なる顕彰制度を設けております。

しかし、ご両人の蓋棺後早6年を越え、会員の新旧の入れ替わり、また懇意な会員の記憶も忘却の彼方に消えつつある昨今のため、両氏の想い出集出版を計画いたしましたところ、早速多数のご寄稿をいただき、誠にありがとうございました。ここに再度ご両人のご冥福を心よりお祈りいたします。

1994年6月20日



山 田 彝 会 員

Tsune "TEDDY" YAMADA

3 / 31, 1924 生

☆国際ビジネスコンサルタント

9 / 17, 1970 入会

6 / 30, 1972 退会

7 / 31, 1972 再入会

7 / 12, 1988 寂

経歴 東京生まれ、旧制東京高校から東大法学部卒。

日本レミントン・ランド営業部長、住友スリーエム、
富士ゼロックス社マーケティング・プランニング部長兼海外事業
部長、東南アジア地域支配人を経て、

43年マーケティング専門のコンサルティング会社 MRDインター
ナショナルを設立。

1982年国際ロータリー3 Hインドはしか免疫プロジェクトのボラ
ンティアに選ばれて、南インドで約1ヶ月間奉仕、

RI会長から個人表彰を受賞

〔趣味〕水泳・スキンドライブ・東南アジアの研究



峰 英 二 会 員

Hideji M I N E

1 / 13, 1920 生

☆泌尿器科医師

2 / 24, 1973 入会

6 / 9, 1989 寂

経歴 浅草に生れ、鎌倉で育ち。

旧制成城高校を経て千葉医科大学を卒業。

海軍軍医学校、潜水学校を終了し、潜水艦乗組軍医として勤務。

一時戦死の広報を発令されるもシンガポールにて終戦を迎え、
捕虜生活3年余。

生還後東京通信病院勤務13年、1959年より九段坂病院に勤務し、
1980年2月1日定年退職。

非常勤となり、7月1日より熱海温泉病院に勤務。

千葉大学医学部講師、日本泌尿器科学会評議員
など歴任する。

《趣味》スポーツ・旅行・音楽

「山田・峰社会奉仕賞」のしおり

山田・峰社会奉仕賞について

国際ロータリーは1986年7月から5年間に亘り地球上からポリオ、ハシカ、ジフテリア、結核、百日咳、破傷風などを撲滅することを願い1億2,000万ドル(約200億円、日本担当分40億円)を目標として募金キャンペーンを実施し、1991年6月募金総額2億1,732万ドルに達し、当初の目標をはるかに超えてこのキャンペーンを終了しました。我が国での募金総額は48億9,856万8,628円に達しました。

この国際ロータリーのキャンペーンは、東京麹町ロータリークラブが我が国の2580地区と同2750地区の各ロータリークラブにポリオの撲滅運動を提唱しこれが国際ロータリーの運動として発展したものです。

東京麹町ロータリークラブの会員であった故山田彝さん、故峰英二さんのお2人は、早くからポリオの惨状に深い関心をよせられ、南インドでポリオに苦しむ子供達の調査を2回に亘り実施され、その状況をつぶさに報告されました。この調査委員会報告が東京麹町ロータリークラブのポリオ撲滅運動提唱の原動力となったものです。

東京麹町ロータリークラブは故山田・峰会員の国際ロータリーポリオ・プラス活動における優れた功績を顕彰し社会奉仕の分野において優れた活動を行い、顕著な業績をあげられた個人、グループ、団体及びロータリークラブ会員を表彰し、これによって社会奉仕活動の充実発展に寄与しようとするものです。

山田さんの書簡から

1984～85年度 地区ガバナー

近藤正夫

(東京城北RC会員)

私が、当時、世界社会奉仕の地区委員長山田君よりオフィシャルに受信した3通11枚(A4版)の書簡をここにをお目にかけます。

山田・峰両君の偉大なお仕事、その能力、人間性をこよなく惜しんでいます。

両君と再会の日を楽しみに。 合掌

【第1信】

1985年4月17日

国際ロータリークラブ第258地区
ガバナー 近藤正夫様

拝啓

いつもお元気でロータリーのためにご活躍、およろこび申し上げます。

南インド・ポリオ免疫プロジェクトにつきましては、私どもは、国際ロータリー第320、321、322、323地区のガバナー、ならびに担当責任者の方たちに、零下20度以下で経口ポリオ・生ワクチンの冷凍保管のワールド・チェーン設備が整っているところでスタートさせるという方針を堅持してまいりましたが、このところ州政府の援助があったようで、マドライに冷凍庫が設置されたので、是非視察にきて欲しいという連絡が第322地区の委員長パストガバナーのスンダラパンディアンさんから連絡がありました。

これで現在までのところ、下記の各地で南インド・ポリオ免疫プロジェクトのために、零下20度以下でワクチンを保管できる冷凍庫が利用できることが委員会報告されています。

第320地区	コチン
第321地区	トリヴァンドラム
第322地区	マドライ
第323地区	セイラム

上記の地区のガバナーの方たち、また担当のPOGの方から、上記各

地の冷凍庫をインスペクトした上で、上記の各地をそれぞれの地区でのモデル地区として選らんで、ポリオの免疫プロジェクトを発足させて欲しいという要請が寄せられております。

つきましては、下記の要領で、当地区より、ロータリアンのボランティアを派遣いたしたいと存じますので、ご許可いただきたくお願い申し上げます。

派遣ロータリアン氏名

峰 英 二

東京麹町 地区世界社会奉仕
委員会委員

山 田 彝

東京麹町 地区世界社会奉仕
委員会委員長

派遣地域 インド

派遣の目的 上記各地の冷凍庫のインスペクション免疫プロジェクトの細部の打合せ
州政府公共保健省スタッフとの打合せ
ユニセフとのワクチン購入、輸送についての打合せ
各地でのプロジェクトのPR活動

派遣期間 4月20日発・5月12日着 合計22日

経費支出 第258地区と第275地区とで半分づつ分担
第275地区の世社委員会・山田委員長より、第275地区

ではボランティアが出せないなので、当地区のボランティアに両地区の代表として奉仕願いたい。

費用は半分ずつ分担するから、という口頭の連絡をもらっています。

報告書の提出 報告書の提出は帰国後1ヶ月以内に提出することにし
たいと思います。

以上の要領でボランティアを派遣したいと思いますので、何とぞご許可いただけるようお願い申し上げます。

敬具

国際ロータリー第258地区

世界社会奉仕委員会

委員長 山 田 彝

コピー 戸田地区幹事

P.S.

ボランティア派遣要綱では、ボランティアの奉仕の最低期間を出発日ならびに帰国日をふくめて3週間とし、一度ボランティアとして奉仕してきた人たちについては、2週間を認めることができるよう、規定してあります。

今回は、当初は321地区のトリヴァンドラム、323地区のセイラムの2ヶ所のコールドチェーン設備のインスペクションと細部の打合せ、指導を予定して計画を組みましたが、その案内を320地区、322地区に出しましたところ、両地区から冷凍庫の用意ができたので、来て欲しいという要請があって、4地区を廻らなければなりませんので、22日では相当に忙しいスケジュールになることと思います。

コピー 戸田地区幹事

【第2信】

1985年4月19日

国際ロータリー第258地区

ガバナー 近藤正夫様

前略

明日から南インド・ポリオ免疫プロジェクトのために、インドに
てまいります。

今年は、このプロジェクト募金の最後の年でございますので恐れ入
りますが、ガバナーから各クラブに協力要請をお願いいたきたいの
です。目標額は800万円です。

敬具

世界社会奉仕委員会

委員長 山田 彝

【第3信】

1985年4月19日

国際ロータリー第258地区

ガバナー 近藤正夫様

前略

カナダから南インドで独自にポリオの免疫をしたい、という申し入れについて、ロータリー財団の特別助成金の担当者のパトリシア・グレーネヴォルトさんから、同封の書信がきました。

要旨はカナダの638地区は南インドの323地区と協力して、日本の258、275両地区のポリオ免疫プロジェクトのたりない部分を補足することだ、ということです。

これについては、カナダの638地区がどういった計画を持っているのか(これは、私のカナダの638地区ガバナーに出した手紙に書いたとおりです)、教えてもらわない限りこちらとしては、手のうちようがありません。昨年11月にマドラスから2人のロータリアンが来日しました。2人とも323地区の委員会の委員長もつとめているロータリアンで、私とは旧知の間柄です。第275地区の世界社会奉仕委員長の山田さんと2人で会ったところ、2人から「第323地区はマドラスでポリオのプロジェクトをスタートさせることに決定した。ガバナーのプルショータマンさんも了承している」と言います。「しかし、マドラスではワクチンを保管する冷凍庫がないのに、どうするつもりか？」ときくと、「購入するつもりです」と言います。

こちらとしては、ガバナーのプルショータマンさんから連絡がないの

で、おかしいと思って、そのままにしておきました。その後ブルジョータマンさんから、第323地区はセイラムでプロジェクトをスタートさせるという通知がありました。

その間、321地区の医師のロータリアンに依頼しておいた、マドラスの旧型冷凍庫の利用についてのチェックの返事がきて、旧型冷凍庫もポリオのプロジェクトには利用できない、ということが判っています。

こうしたことは発展途上国に対する援助では、よく起こることで、2人のマドラスのロータリアンは、それなりに自分たちで、そう思っているわけで、故意に眞実とはちがうことを言ったのではなく、自分たちの希望的観測を眞実として言ったということです。

現在、特に323地区では、こうしたプロジェクトを、ホーム・タウンに持ってくる、あるいは自分のおかげでこういうことができるようになった、と利用したい人たちが出てきているようです。

私どもは、プロジェクトが、こうしたことに利用されないよう、ワールド・チェーンの施設のあるところから、スタートさせるという方針で進めてきて、現地の人たちの競争には巻き込まれないようにしています。これはポリオ2005年の委員長のシーバー博士からも、完全に同意するという手紙をいただいております。

さて、財団のグレーネヴォルトさんに対する返事ですが、これはやはりカナダの638地区のプランを知らなければ、何とも言えないと思います。

基本方針についての合意がなく、同一地区のなかで、ポリオの免疫を実施するという事になると、混乱が生じます。

それに現在のところ急務はポリオの免疫についての知識の普及のための教育、モデル地域におけるパターンの設定です。

こういうことをしなければ、現在のように、3バース以上のワクチンを飲ませた子供がポリオで死亡するというような、コールド・チェーン不備による効力を失ったワクチンの投与を防ぐことはできません。

簡単にカナダの計画を知らせて欲しいとあってあるので、それを見てからでなければ、無条件でというわけにはいかない、と手紙を出しておこうと思いますが、いかがいたしましょうか？

敬具

世界社会奉仕委員会

委員長 山田 彝

コピー 戸田地区幹事

山田さんを思う

1992～93年度 地区ガバナー

松島寛容

(那覇西RC会員)



昭和62年3月13日(1987年)

山田彝さんと(於・ニューオータニ) ロータリー年次大会

山田さんとは、上田正夫ガバナー年度(1983-84)にお目にかかったと思う。

山田さんは地区世界社会奉仕委員長(WCS)で、私は沖縄分区代理であった。

山田さんは非常に温かく、とにかく面白い、談論風発である。そのうちにおじいさん、おばあさんが沖縄の廃藩置県（琉球王国→明治5年琉球藩→明治12年 沖縄県）の時に、当時の明治政府大久保利通内務卿が松田道行之内務大丞を沖縄に派遣しているが、その随員として沖縄に渡り首里に居を構えていた事があるという興味深い話になった。

それは1879年前後の話である。

今と違う樹林鬱蒼としていたであろう、古都首里の情緒を満喫されたであろう沖縄の古き良き時代の事である。

おばあさんは良くこの事を山田さんに話をされていて、沖縄に関する文献も数多く残っていたとの事であった。

それからお互いに、更に親しみを深める様になったのではないと思う。

そうこうして一度沖縄に来てくれという事になり、服部謙太郎ガバナー年度後半、1986年3月24日(月)より4月1日(土)迄の一週間お招きをして、那覇・那覇西・那覇東・浦添クラブでポリオの卓話をして貰ったが大きな反響を呼んで、那覇東の伊藤悦夫琉球大学医学部教授からは是非その話を学生に聞かしたいとの要請があり、とうとう大学へ出掛るというグッドハプニングもあった。

そのあとだれか南インドへ行って欲しいという話になって那覇西クラブ大仲 良一(沖縄セントラル病院院長)と大宜見 斉(92-93年地区幹事)のお二人が白石雄二ガバナー年度、1988年1月から約1ヶ月間ポリオ投与実施状況とコールドチェン実態調査の為、渡印している。

その他に那覇東・安澄文興琉球大学医学部教授も同行を希望しておられたが、大学の日程の都合で断念されている。

当時の白石ガバナーと阿部孝地区幹事がその前後、この事を大変心配しておられた様に思う。大仲、大宜見両氏共その後も至極健康であるので問題はないが、印度の風土病についての懸念であったのではないだろうか。ひょっとしてその年度クラブ会長であった山田さんと峰先生の健康上に問題が生じていたのではないだろうか。

そうであれば非常に残念な事であったと思う。

大仲、大宜見両氏渡印以来、彼の地のウランバートルロータリークラブとの交友は繋がっている。小児麻痺で車椅子のチャンドラー青年が大仲さんの病院で半年間治療(無料)を受け、自分の脚で歩いて故国へ帰っていった。

天にも昇る様な気持であったと思う。

ウランバートルクラブは大仲氏を記念すべく「大仲ファンド」という奨学制度を造り、医学を志す学生の支援に乗り出し、那覇西クラブも協賛をして交友は続いている。これも山田さんの足跡の一つである。

山田さんが帰京する日は土曜日でゴルフを楽しむ事にした。山田さんはキャリアーは長いが、長いことやってないよという事で、盛んに空振りを繰り返し乍らほほ笑ましい思い出も残して逝った。

これからも末長く色々と啓発して下さったであろう方を失った哀しみは大きい。

峰先生とは挨拶を交す程度であったが、両氏の足跡は余りにも大きい。お二人なくしてロータリーのポリオプラスは語れない。

只管にご冥福をお祈りするばかりである。

—完—

ツネさんのこと

1984～85年度 地区幹事

戸田 一 誠

(東京練馬西RC会員)

私が初めて「ツネさん」を見掛けたのは、随分前、中央区分IGFで彼が麹町クラブの世界社会奉仕委員として登壇し、「ポリオワクチンを南インドに贈るプロジェクト」について話した時である。

早口で要領を得ない喋り方をする人、というのが当時の印象であったが、それは才気が走って全てを一緒くたにして話そうとする為だ、ということが後からわかった。

後年地区幹事を引き受けることになって、当時ガバナー事務所に山積していた「ツネさん」のレポートを整理し、R財団からの金の流れをわかりやすくする作業を手掛けたことから私達は急速に接近した。大金の集まる場所はいつでも掃除をしておく必要があり、彼はどちらかといえは掃除が下手だったのである。

麹町クラブのWCSプロジェクトが、RIの「ポリオプラス」プロジェクトに発展した経緯は多くの人の知るところである。まさしく彼はキーパーソンであった。

私事で恐縮だが、私もかつて、仏陀成道の聖地ブダガヤに幼稚園を建設する仕事に従事したことがあり、その当時は一年の中、何週間も北インドの田舎に滞在して現地の建築業者との打合せや作業の監視役を経験したことがあって、その経験は「ツネさん」の説明の全てを注釈無しに

聞くことが出来る下地となっていた。そのことが二人をより近づける原因ともなり、又、彼が不本意乍ら受けていた多少の誤解を晴らすのに役立つと思う。

インドの現地の事情というものは、インドの外にいて西欧化した一般常識を以って想像することを許さないことが多い。

私はある種の虚しさから、そのインドの仕事の一線を疾うに退いて、インドについて多少屈折した思いでいたのに、イイ年した彼は真剣になって「ポリオプラスプロジェクト」に取り組んでいる。一体コイツは何者だ。

彼は時々「きだみのる」のことや「三好京三」の事等を語ってくれたが、残念乍らよく憶えていない。

或る時、新宿のハイアットリージェンシーで地区の会合があった時、「ツネさん、時々気になる咳をするネ」というと、「ウン、原因が良くわからない。インドの砂塵か、或いは寄生虫かもしれないナ。但し、肺ガンじゃないんだ」と強調していたのが記憶に残っている。

私が、インドの写真集の出版に関った時、「イイモノがある」と言って、アンコールワットを丹念に撮影したロールのカラーポジフィルムを大量に貸してくれた。インドシナがまだ穏やかだった頃の、ご家族の日常も含めた貴重なフィルムであった。

暫くそのままになっていた或る日、奥様から電話があり、フィルムを返して欲しいというお申越しで、迂闊にしていた私は、長い間大事なフィルムを借り放しにして何の反応も起こさなかった事を恥じ、非礼のお詫びを申し上げると共に、その電話で奥様から「ツネさん」の具合があまり良くないということを伺ったのである。

今思えば全て間が悪かった。いずれ退院したら等と考えている中に訃報が届き、葬儀の折も出張と重なり最後のお別れも出来なかった。

「ツネさん」随分むつかしい字の名前だね

「ツネさん」僕はあなたと出会えて良かったよ。一方的にトクした。

「ツネさん」咳き込み乍ら頑張ったポリオプラスプロジェクトは多勢の人を巻き込んでとてつもない輪に広がったネ。

「ツネさん」本当にありがとう。

あなたと近づきになれたことを感謝しつつ。 合掌

南インドに陽がさして

1992～1993年度 地区幹事

大宜見 齋

(那覇西RC会員)

「君に合ってもらいたい人がいるのだが……。」パスト・ガバナー松島寛容(1992～1993)さんから紹介されたのが山田彝さんとの最初の出会いだった。当時275地区ガバナーの渡辺和美さんが日本ポリオ・プラス委員会の委員長に指命され、山田さんがポリオ・プラス・インターナショナル・コーディネーターとなったことは知っていた。その山田さんが沖縄を訪れたのである。ともあれロータリーの真剣な話は沖縄では習慣上夜である。また夜のほうが話はまとまる。

「お酒は飲めますか?」「好きですよ」

それでは決まったと山田さんの歓迎会として、馴染みの料亭で那覇西RCの有志の面々にお出まし願って会を開いた。松島さんはかねてから昵壟の間柄であるので話が弾んでいた。思えば山田さんは南インドのボランティア活動から帰ってきたばかりで、お疲れの様子もなく元気そうにみえた。病気という気配は全然感じられなかった。むしろ色白の肌が泡盛の味に紅色になって希望に満ちあふれる状況にあった。著名な人類学者の父の血を引いておられるだけあって、アジア周辺の文化、言語、習慣、地理についてはめっぽう明るい。インドの話になると目を輝かして話がとぎれない。ラオスの言葉と沖縄の方言の言葉の発音がよく似ている。したがって沖縄の起源は南方説が有力だろう。首里城城下の弁財天堂の絵文字はインドのマンドラ教の絵文字と合致している。かなり古

い時代からインドとは交流があったのではないか、話ははずんだ。

実は山田さんは今回沖縄を訪問した目的を、何時話そうかと考えていたのである。それはポリオ・プラス・プロジェクトに対する沖縄サイドの協力推進方の依頼であった。松島さんをご協力について即座に快諾した。しかし山田さんにはもう一つ協力願いがあった。それが重要だったのである。それは南インドにおける山田さんと峰先生が活動してきたボランティア活動と同一の性格のチームをインドに、沖縄サイドから派遣してほしいということであった。それには松島さんも即答は出来なかった。

インド、得体の知れない広汎な国に、私も少々の知識がない訳ではない。沖縄とインドと亜熱帯農業分野では似ている所が多い。したがって農業問題で交流した人々が帰ってきたばかりで、二度と訪問したくない国だと聞かされていた。しかも南インド全体が共産主義体制で占められている。ロータリアンといえども一労働階級にしか外ならない。人道的論理が通用するかどうかも疑問である。いずれにせよ山田さんが「友」の中で南インドのポリオの現況報告をした。蚊一匹を殺してはいけない。食事は菜食でしかも便所にトイレットペーパーはなく指で仕上げるという全てに悲観的な発表である。何一つとっても「OK」というわけにはいかない。後でわかったのだが松島さんが「会ってほしい人」という意味が理解できた。何とか山田さんの熱意を汲んで沖縄サイドでの南インドにおけるボランティア別動隊をまとめてくれという考えなのである。

「コーディネーターとしての山田さんのテリトリーは韓国、台湾、香港、ではなかったのですか。しかも南インドへはカナダ地区から支援を送っていると思うが……。」尋ねますと、実は麴町RC15周年記念事業としてポリオ・ワクチンを贈ったことに始まるという。そして向こう

2ヶ年間に免疫接種行動隊を2パーティー、南インドに派遣することを約束してあるというのである。またこれは258地区と275地区とのポリオプロジェクト共同事業で、その第1波として山田・峰先生のパーティーが終えてきたという。私は正直いって山田さんに会わなければ良かったと思った。

しかしその夜の酒は旨かった。同じロータリー問答でも、アクティブな論議は時を忘れる。山田さんの熱弁はまだ続いていた。私も何となく山田さんの顔を見てもこの人には断りきれないのではないかという予感が走った。少々酒にも毒されていたのか考えてみようという気にもなっていた。この年で3週間も南インドを駆け巡ってきている。敬意を表さなくてはいけない。いずれ誰かがやらねばならないとすれば早めにお引受けしようという気分が変わりつつあった。白髪のスペシャリスト山田彝さんとの出会いはこのようないわくつきの出会いだったのです。「考えてみましょう」と申しあげてその夜は別れました。しばらく放っておくと諦めてくれるのではないかと安易な気持ちでいたのが間違いで、翌日から電話で決心をせまられた。

「わかりました、お引受けいたします」

この時、私は山田さんの熱意に負けてお引受けしたものの、どのようにチームを編成したらよいか全く無の状態であったのである。その後東京と沖縄とで、お互いに連絡をとりながら、山田さんとの約束を果たすため、東奔西走の毎日である。山田さんとは1チームを編成するということでしたが、ご協力するのであれば2チームを編成し、南インドでの活動も或る程度余裕をもつ意味から滞在期間も6週間とする計画で作業を進めた。

この頃から山田さんと連絡がとりにくくなってきた。ご兩人とも不治

の病がかなり進行していたことに私は全然気づいていなかった。チームを編成するにあたって困ったことがおきた。ポリオ(急性灰白脊髄炎)、これは先進国、発展途上国、後進国にも共通にあり得る病気で比較的若いロータリアンの医師でも処置できる。しかしプラスという病気はハシカ、ジフテリア、破傷風、百日咳、結核で昭和16年生以前の医師でなければ処置できない。これらの病気は先進国では、もうないのである。したがって医師が限定される。那覇西RC大仲良一先生の協力を得て、山田さんの要望通りのチームが出来た。その旨山田さんに連絡したら「ありがとう」といって喜んでくれた。それが山田さんと私の最後の交信となってしまった。

1987年6月、白石ガバナーノミニエ、阿部次期幹事、木本茂三郎カウンセラー、塩月賢太郎次期WCS委員長を招集しポリオ・プラス・プロジェクトに対するコーディネーターとしての仕事を遂行、南インド・ポリオ・プラス免疫接種並びに実態調査チームを沖縄分区那覇西RCから実行することを報告し、全てのポリオ・プログラムに参画することが困難になったのである。病気が悪い方向に進行していたのである。ポリオに関する関係者も山田さん、峰先生の状況は知っておられた。山田さんの意向は塩月賢太郎次期WCS委員長によって引継がれた。我々の南インドへの出発の期日が近づいてくる。特に山田さんは記録として残し、

- 1) 南インドにおけるポリオの接種状況
- 2) コールド・チェーンの実態調査
- 3) 公的病院のポリオ・キャンペーンへの参画指導

これら3項目を重点的に調査、実施してほしいとのこと。出発を間近に控えて白石ガバナーから念を押された。大変だろうと思うが南インドへ行くのは中止してもよいのだよといわれた。山田さん、峰先生のことが

あるから一番心配して下さったのは当時の白石ガバナーであった。しかし私は「ご心配なく、このことは山田さんと私の約束ですから」と云ってこちらからお願い申しあげた。出発の前日、山田さんと連絡をつけたかったのですがだめでした。

1988年1月～1988年2月までの約6週間、南インドに出発した。山田さん、峰先生の偉大な足跡を訪ねて南インド320地区、321地区、322地区を訪問、特にこの三地区はご両人がハードに活動した地区で、よく皆さん知っておられた。

「ツネ」「ミネ」は元気でやっているか。二人はこの南インドに光を与えてくれた。必ずもう一度ここに来るといったが来れないのか。冷蔵庫にワクチンを保管していたら砂糖水になるではないか。港の冷凍庫に入れ替えなさいと俺をしかりよった。頑固な二人はどうしている。

大勢のロータリアンが山田さん、峰先生の勇気ある行動を称賛してくれた。嬉しかった。

この偉大なるポリオ撲滅運動、天然痘がこの地球中からなくなるまでは200年(1770～1970)も経過した。R Iはポリオを2005年までの20年で撲滅するという。1991年ポリオ・プラス・キャンペーンは成功裡に終結した。このことを待たずして吾々は山田彝さん、峰英二先生お二人の尊い命を失ってしまった。

しかし南インド第2波の交流によって、山田さんの懸案事項であったP.S.G医科大学(ケララ州ウランバートル)に1989年大仲基金(那覇西)が創設され、毎年20名～30名の医大生に奨学金の恩恵を与えている。P.G松島(1992～1993)年度には中国に対し、R Iポリオ基金とは別に日本独自の基金を集め8000万相当のワクチンを贈った。麴町RC15周年

記念事業という種を遠くに蒔いた。それが花となって開いたのである。
そしてクラブに山田・峰社会奉仕賞というものが新しく創設された。

2005年は、あっという間にくるでしょう。その時もう一度、山田さん・
峰先生を思い出して下さい。2005年エスラー・デニング卿を偲び、贈っ
たイギリスへの桜木が満開するのではないのでしょうか。

ご二人の功績を記念して小冊子を発行するにあたり、麴町RC皆様の
益々のご繁栄と今後のご活躍をご期待申し上げます。

平成6年3月末日

ツネさんの思い出

元日本ポリオプラス委員会委員長代行

松 阪 麻樹生

(東京南ロータリークラブ会員)

山田ツネさんとの出会いは今から35年も前になる。J C(青年会議所)世界大会が東京で開かれた時、渉外委員会のデスクで流暢な英語やフランス語で外人会員と談笑しているツネさんの姿に目を見張った時以来である。

次の出会いは彼がゼロックスのマネージャーになった時である。彼は日本では数少ない「プロのマネージャー」を目指していた。彼はその力量を買われてタイ・ゼロックスの支配人に就任して敏腕を振るった。帰国後日本AM(アドレソグラフ・マルティグラフ)社の社長に就任した。ホテルオークラで開かれた社長就任披露パーティーでの彼のスピーチは、今でも僕の目にハッキリと焼き付いている。それほど強烈で、自信に溢れたものであった。部下の外人幹部をつぎつぎに壇に呼びあげて紹介していった彼の姿。彼の情熱そのままの姿であった。

数年たったある日、彼ら電話があり、当時彼が熱心に活動していたメーソンの例会に僕を連れていき、盛んに入会を勧める。すでに昭和41年からロータリアンになっていた僕はそれを断り、逆に彼にロータリーに入ることを熱心に勧めた。数ヶ月後、彼は麹町クラブに入る。

また数年が過ぎ、今度の出会いはグアムであった。彼は持ち前の実行力で日本の少年数十名を引率して毎年グアムを訪問し、親善水泳大会を催していた。僕は故渡辺ガバナーの公式訪問のお伴で行っていたので偶然の出会いとなったのである。

その後世界ロータリーはポリオプラス運動を展開することになりR Iはアジアの総責任者に故松平一郎パーストガバナーを、日本の責任者には故渡辺和美パーストガバナーを指名してきた。松平さんの下でロータリーの友全国常任委員を4年勤め、渡辺ガバナーの下で地区国際奉仕委員長を勤めた縁で、コーディネーター就任の委嘱を打診されたとき、僕は躊躇無くツネさんをインターナショナル・コーディネーターに推薦し、自分は日本コーディネーターの役を引き受けた。それより前、ツネさんはすでに麹町ロータリークラブのみなさんと南インドのポリオ・ワクチン接種活動に身を投じていた。すなわち、彼はポリオプラス運動の先駆けを果していたのである。その彼の慧眼と実行力に我々は脱帽した。

しかしそのインド僻地での生活中に彼はなんらかの病気を拾ったのではないだろうか。その後マニラで発病したと聞いた。帰国後も健康がすぐれなかったようであり、ついに帰らぬ人となった。彼の葬儀には静かな中に、彼の偉業を偲ぶ多くのロータリアンが集まった。しかしそこには渡辺委員長の顔もなかった。彼もその少し前に不帰の客になっていたのである。二人のその献身的活動に皆の感謝の心は集中した。

スバラシイ情熱と実行力の人「ツネさん」
どうぞ安らかにお眠りください。

テディーの思い出

Fred ESTABROOK
(TUMON BAY RC会員)



ツネさんが毎年日本の多くの青年を連れて Guam を訪問し、水泳競泳を通して国際親善の実をあげていたことはご承知と思いますが、当時からその行事の Guam 側の中心になっていた

MR. FRED ESTABROOK (TUMON BAY RC)
に書いてもらいました。

松阪 記

Rotary Club of Tumon Bay

P.O. BOX 7929 • TAMUNING, GUAM USA 96931

These thoughts were put together by three Rotarians who knew and loved TEDDY YAMADA for what he was, "A GREAT ROTARIAN".

Rotarian Pat Sagisi first met Teddy in the late 70s at a Rotary District Conference in Japan. His analysis was, here is a rare individual, a true Rotarian, one who is sincere in both words and action. These thoughts made for a lasting relationship between these two rotarians.

Past President John Dierking calls Teddy a beloved friend of the people of Guam, one who lived the Rotary motto "Service Above Self".

Past President Fred Estabrook remembers Teddy because of his organizational skills of the successful swim meets put together by Guam Rotary Clubs and the Rotary Clubs of Japan.

Over the years, this leadership by Teddy not only made for successful swim meets but for international relationships that very few persons could have had the skill to bond together our two cultures.

The Rotary District Governors, with the assistance of Teddy, were very instrumental in building this relation that has brought young Japanese swimmers in close contact with Guam families. Many of these contacts have lasted for many years. Some of the swimmers have selected University of Guam for their university education.

The Rotary Club of Tumon Bay provided the funds for the swim meets by raising monies operating a refreshment stand and a souvenir gift shop on the site of the meet.

The real beauty of this man's personality was the manner in which he brought these swimmers together. Most of the Japanese swimmers stayed with local Guam homes during their stay on Guam. They learned the customs of the family life in an American style community. Teddy Yamada often said he looked forward to staying with Rotarian Pat Sagisi when he visited Guam because of Rotarian Pat's son Patrick who was one of Guam's greatest swimmers at the time.

Rotary Club of Tumon Bay

P.O. BOX 7929 • TAMUNING, GUAM USA 96931

-2-

Needless to say, hundreds of swimmers, coaches, and parents from Japan and Guam, through the years, were involved and are still involved in this magnificent program, thanks to the efforts started by Teddy Yamada, promoting international understanding and good will between Japan and Guam. WE ALL MISS HIM!

The enclosed picture is of the signing of the sister club relationship, NAS Tokyo Japan and the Manukai Swim Club of Guam.

人 間 山 田 彝

地区研修リーダー

指 田 勢 郎

(田無けやきRC会員)

山田さんは、ロータリアンとして私の人生に大きな影響を与えた一人であった。そして今もなおその影は長く尾を引いている。

フィリピンの上水施設を対象とした我々武蔵野分区が実行していた世界社会奉仕活動に際し、日本側の窓口を分区から当時任されていた私は、色々な問題を抱えて悩んでいた。その理由はフィリピン側だけでなく、むしろ日本側の意見不統一や、単年制度へのこだわり、冷淡さに抵抗を感じていた。

そんな時の年次大会で、山田さんの南インド、タミールナド州での子供のポリオ患者の悲惨な現状と、それを助けたいとする人間としての自然な感情をロータリアンとして考え、地区として行動しようと言う話を聞いた。

決して主張を強要しようとしめない紳士的なロータリアンらしい態度の中に潜む人間愛を感じ、人間の大きさに感動した。分区の中の小さなものでなく、出来得れば地区内を巻き込み行動しようとする意志に驚嘆し、私の活動への強い精神的サポートを感じ、氏の主張に同感の意を手紙にし、クラブでの卓話を依頼した。それを快く受けてインドの現状とポリオに対する認識をより深めることが出来、この時から山田氏との交流が始まった。

その後、地区世界社会奉仕委員に推された私は地区としての活動の限界と現在の日本のRCにWCSの意識の強調が如何に必要なかを知った。この期、委員長の山田さん、峰さんのお二人は再び南インドを訪問された。

次年、峰先生が地区委員長に任ぜられ、山田さんは彼が口火を切ったと言える全世界的ロータリー活動のポリオプラス・プロジェクト・アジア・ゾーン・コーディネーターとなり、活躍が約束されたに見えたが突然、その志なかばにして急逝され、心のリーダーを失った私のみならず、ロータリーのWCS活動も大きな痛手を被った。

峰先生は山田さんのフォローを進められ、その後を東京クラブの塩月賢太郎先生が後任として継承されたが、峰先生も共に突然の病で急逝された。お二人の急逝でインドとの糸がプツリと切れたようで不安が残ったが、山田、峰時代からの残務の整理と地区としての委員会活動は如何にあるべきかの根本的な問題検討もあったが、両氏の遺志として何とかやり遂げねばならぬ義務を感じていた。

塩月氏より副委員長の依頼を受け、協力していたこの時期、地区委員、沖縄那覇西クラブ大宜見さんと同クラブ大仲先生のお二人が南インド、タミールナド、ケララの両州を地区活動として1ヶ月余にわたって訪問され、ポリオ・ワクチンに対する現状の確認を実行、この地区でのワールド・チェーンとその付帯設備の充実こそ、南インドでのポリオプラスの成功の鍵と報告した。二人はユニセフのインド支局をも訪問し、強力冷凍庫と停電に対する発電施設拡充への協力を依頼し帰国した。

(当時-30°C以下の冷凍庫は南インドに存在せず、ポリオワクチンは保存不能であった)

大宜見、大仲両氏の持ち帰った資料から、次期に地区委員長となった私は、マドラス市外の過去に知己のあったメンバーの医師名を発見し、その筋から地区ガバナーに接触、現状を調査、ユニセフからの冷凍庫の配布はあったが、その管理の為に -30°C 測定可能な温度計及びスポット温度計の不足を知り、これに対応、山田さんの後任となられた松阪コーディネーターのお世話で、水銀寒暖計300本、デジタル・スポット温度計40個を発送し、ワクチン管理に万全を得たとの報告をインドから受けた。その後の南インドにおけるポリオ・プラスの成果は皆の知る所である。

山田・峰両氏の遺志はかくしてポリオ・プラス・プロジェクトとワールド・チェーンの充実として果たされたと言える。その後、私の後に大宜見氏が地区委員長となられ、幅広い活動をなさったが、このように2580地区の中にも両氏の撒いた種子は実を結び得た。

今般、麹町クラブの中に山田・峰両氏の偉業を顕彰しようとの話ありと渡辺会長からお聞きし、尊敬する両氏の私の知る一面と、両氏に始まった地区世界社会奉仕委員会の流れを、拙文ながら両氏を偲び一文させて頂いた。

山田 彝さんを知る一人として

琉球大学医学部教授 解剖学

安 澄 文 興

(那覇東RC)

記憶に自信がなくなった年代となって、正確な記述に不安を抱きながら、一文を寄稿させていただきます。

ロータリークラブに入会して1年未満の時に、松島パストガバナーのお誘いで、ロータリーの紹介者で、大学での同僚でもある病理学の伊藤悦男教授に連れられて、料亭で昼食をご一緒したのが、山田さんとの初対面でありました。この日と翌日との二日間が全てであったのです。

山田さんとお話した中で、強く印象に残っているのが、山田さんの豊かな国際性と、鯛の刺身で、後者から先ず書くことにします。

山田さんは各地を旅行されて食通でもあったのでしょうか。昼食に出た鯛の刺身が話題となりました。「鯛の刺身は大阪で食べるのが最高」、「鯛のメめ方に違いがある」とおっしゃったのです。

私は大阪生まれの大阪育ちで、成人してから沖縄にくるまでに、金沢、千葉、宮崎、福岡と移動し、旅行好きでもあったものですから、日本国内を相当動いておりました。どの地を訪れても、鯛の刺身は大阪で食べる方が、色といい、歯応えといい、より美味しいと思っていましたので、関東出身の山田さんの弁は正に我が意を得たりだったのです。この件は今でも正しいと頑張っておりますが、先でもう一度、山田さんと意気投合するのを楽しみにしています。

ロータリーに入って間もない私にとって、山田さんのポリオプラスの取り組みのきっかけと言えるインドでのお話は、国際性に富むまったく素晴らしいものでした。インドへは元々結核の件でR Iから依頼されて行かれたとのこと。インドの地方都市なのでしょうが、街中のそこそこに、歩行も困難な年端もいかぬ子供達が這ずっているのを見て、「本当にショックだったし、何と言ってよいか、正に衝撃だった」とおっしゃっていた。結核どころでないポリオの撲滅を訴えられ、その後の色々な問題を一つ一つ解決されて行かれた実行力と指導力には、目を見張るものがありますが、R Iやインドの行政機関を相手にして、国際人の山田さんだったから成し得たことでした。ポリオワクチンの投与に当たり、コールドチェーンの態勢整備、投与についての教育に関してもお聞きして、私はこのような生き生きとした使命感あふれるお話を、是非、医師を目指している私共の学生に聞かせたいと思いました。翌日の午後に担当する時間があり、山田さんにお問い合わせしたら、快諾され、ほぼ1時間の特別講義が実現しました。

山田さんの御講義を拝聴したのは琉球大学医学科の4期生(昭和59年入学)で、彼等もすでに医師になっております。あの時、私は山田さんのお話を私の学生に是非聴かせてやりたい!!、聴くべき内容だ!!と確信してやって頂きました。山田さんと国際性と奉仕の心がインプットされた彼等の中の誰かが、きっとリーダーシップを持って、世界で活躍してくれるものと信じています。

最後に、山田さんがおっしゃった言葉で忘れられないものがあります。

「今は未だ Platform に立ったばかりです」

山田 彝 様 の こ と

旧制東京高校学友夫人

田 村 友 枝

新庄様から、山田彝様のお話をうかがったのは、大分以前の事でした。愚息が、日枝神社のボーイスカウトに入団しておりますが、団委員長のお役を務めていられるのが新庄様で、私は新庄様を通じて山田様がロータリアンである事を知りました。

山田様と亡夫とは、東京高校時代の学友で文乙で御一緒の方でありました。亡夫は生前

「この字は何と読む？ 彝」

むずかしい字を書きまして私に見せたのを覚えております。

「さて、何んと読むのかしら」「つねと読むんだよ」

「へえー、つねさん。可哀想にこんなむずかしい字をつけられて、小学校の時はさぞかし書きづらかったでしょうにね」

「つねは、きだみのるのせがれか」

「へえー、だから何か意味があっておつけになったのね」

つねという字を通して、山田様が日本人ばなれをしている芒洋とした方で、日本には余り住んでいなくて、今何処に行っているか解らない方である事も知りました。東高時代の学友の方々は、毎年、同期会を開いてお集まりが続いている様ですが、赤坂見附の一隅で「カギ屋」を開いている亡夫も又、変わった方の一人でした。

お住まいが辨慶橋を渡って、上智大学の裏手の通りに面した所にあり

ましたので、赤坂見附方面にご用の折には、突然姿を表し、

「おい、田村、元気か」「おー、ツネ」

昔に返って乱暴な言葉を二言、三言言い交してさっと立ち去る事もありました。

或る夏の夜、突然表れ

「おい、田村」「おー、つね、何処へ行くんだい、縁日か」

「あー、一つ木通りの六地藏の縁日か」「まあ、行ってこいよ」

「それじゃー又な」

と離れて待っているお子様を連れて一つ木通りの方面へ曲がって行かれました。山田様も、「御縁日」なんてやっぱり日本人なんだなあと、お父様らしいお姿をお見かけしたのは、それが最後でございました。

つかみどころのない様な風貌、御性格、日本人には稀有な存在であられた山田様も、たくさんの御功績を残され鬼籍に入られた事は、かえすがえすも惜しい気が致します。

今頃は、昔に返って「オイ、田村」「オイ、ツネ」で楽しく語っている事ではございません。

峰先生を思い出して

東京千代田RAC

OB 平田 幸彦

会員資格の中に、18才から28才までと云う年齢制限があるローターアクトにとって、例会その他の活動の場で、ロータリアンの皆様方と接する機会を持てることが、自分自身を成長させる意味で、非常に大きな力となりました。社会経験も十分でない若者達が、各々の人生を切り開いて行くため、壁にぶつかり、悩み、試行錯誤を繰り返す時期が、ローターアクト年齢だと思います。私にとっても、クラブの運営を通して様々な経験を積み、広く社会を見すえる勉強ができて、現在の私自身を考えるにあたって、大変貴重な年月であったと思います。

多くの魅力あるロータリアンの方々より、たくさんの御指導を頂きましたが、峰先生からお受けしたローターアクトへの愛情と情熱は、私達にとって比類なく大きなものでした。

先生は、いつも私達の中へはいつか来て、共に喜び、共に悩んで下さいました。先生から見ると簡単でつまらないことでも、私達自身で解決できるまで、一緒に早さで歩いて下さいました。

他地区や他クラブとの交流会などでよく「僕は最年長のローターアクトだ。」と自らを紹介しておられましたが、最年長の会員でありながら、現役の誰よりもローターアクトソングにある「若さ燃ゆるよ」に当てはまる方でした。私が29才になってローターアクトの定年になったときも、「僕が一生懸命やっているのだから、OB達も手を貸せ」とよく発破を

かけられました。

お忙しい御予定の中で、252地区との交流も非常に応援して下さいまして、何度も仙台、水沢、気仙沼まで同行して下さい、他地区まで先生のファンができてしまった位です。

先生の若さと行動力を思い出すエピソードとして、何と云ってもアイスホッケーがありました。例会にお見えになられたとき、大きなバックを肩から担いでこられたので、何の荷物かとお尋ねしたところ、アイスホッケーのOB対抗戦があるとのことで、午後9時の例会が終了後、重いバックを担いで、何度も後樂園へ向われました。あのバックを担いで振り返りながら手を振られた先生の姿は、私達に何よりのパワーを与えて下さいました。アイスホッケーではありません。サッカーのOB対抗戦の話も、何度かして下さいましたものです。

又、峰先生といえば、お酒がお好きだったことが思い出されます。新年会、クリスマス会は云うに及ばず、他地区との交流会や色々な行事の二次会は、先生の「おい、行くぞ！」の一声で腰が上がりました。銀座、赤坂、六本木、新宿と私達を飲み連れに連れて行って下さいましたが、どこへ行っても行きつけのお店があるのには、驚かされたものです。陽気な楽しいお酒で、飲みながら色々なお話をして下さいる中で、私達にとって参考になる話がたくさんありました。先生がお酒を飲まれたときに歌って下さった数々の歌も例会などのソングリーダーとして、タクトを振られていた姿と一緒に、懐かしく思い出されます。

先生と何年も御一緒させて頂いて、先生が他の方に示される気配りや優しさには、ずいぶんと教えられることがありました。決して目立たない様にさりげなく、色々な方のことを心にかけておられました。私が丁度、十年前に赤坂で花屋を開いたときも、ずいぶんと御心配して頂きま

して、何人も、お客様を御紹介して下さいました。又、よくわざわざタクシーで乗りつけて「元気でやっているか」のお言葉と一緒に注文をしに来て下さいましたので、先生が現在でもまだ、いきなり店へは行って来るような気がしてなりません。

「ローターアクトの目的とは何か?」「ローターアクトの奉仕とは」と云った問題がいつも私達の大きなテーマでしたが、18才から25才と云う若い時期に、峰先生と同じように素晴らしいロータリアンの方々から、色々と教わったことで、一人前の社会人になって行くということが、私達の問題の筈であり責任ではないかと思えます。私にとって、ローターアクトと云う場に巡り会え、本当に有り難いことだとロータリアンの皆様方に心から、感謝しております。

峰先生、本当にたくさんの御指導と思い出を有難うございました。心より御冥福をお祈り申し上げます。

山田さんを思い出して

東京千代田RAC

OB 平田 幸彦

ローターアクト活動の目的や意義、活動の方向性や具体化などについては、提唱以来、今日まで多くの議論がなされてきております。現在もRACで活動している会員やローターアクト委員の方々の間では、色々な御意見が出されていることと思います。二十年で歴史を閉じてしまった私達、東京千代田区RACでも、クラブの歴史の中で、会員不足、プログラムのマンネリ化などの悪循環に陥ると必ず「ローターアクトの奉仕とは？」と云う深みに足を踏みいれてしまったものです。

「ローターアクトは、何をやっても良いクラブ」と云われます。しかし、この「何をやっても良い」と云うのが「何をやったらよいのか」と云うことと隣り合わせのもので、時として非常に大きな問題となって、私達に重くのしかかってきました。この深みにはまると、例会が単なる連絡事項の報告の場になってしまい、残った時間も進展の期待できない議論になってしまうのです。

この様なとき、例会に出席されていたロータリアンの方々から、色々なアドバイスを頂いておりましたが、山田さんのお話は、どこかエネルギーで私達より若さ一杯という感じでした。「何とレベルの低い話をしているのだ。」とかなりあきれていたのかも知れません。何かじれったそうな早口も、どうして、もう少し行動的になれないものか、と云う気持でおられたのでしょうか。曖昧な議論をしないで、問題点を一つず

つチェックして、自分達が本当に何をしたいのかを確認しながらプログラムやスケジュールを作って行けば良いのだと、熱っぽく語って下さいました。一般的に日本の若者は、自分の意見を正しく発表すると云う訓練が十分になされていませんが、海外での生活が長かった山田さんからは、話し方からも、所謂、国際感覚が伝わってきたものです。

もう一つ、私が山田さんについて印象強く思い出すことがあります。十周年の会より一～二年前の事だったと思いますが、クラブ奉仕の行事で、皇居の東御苑に行った時のことです。当時、千代田の会員に宮内庁の侍従職にいた女性がおりまして、彼女の案内で出かけました。苑内の散策が終わり、内堀通りの歩行者天国に出て来たところで、偶然山田さんがスポーツサイクルに乗って、さっそうと現われたのです。サイクルウェアもお似合いで、日焼けした顔にサングラス、半袖シャツにサイクルパンツが見事に決まっておりました。あの例会でのエネルギッシュのイメージそのままと云う感じで、短い会話の後、又、軽快に走り去って行かれました。あの時又、私達は「若さ」と云う意味では、山田さんに負けていた様な気がして、私にとっては、今でもはっきりと思い出すことのできる場面です。

いかにも健康的で、エネルギッシュな山田さんが、病気になられたと聞かされたときは、別の山田さんがおられて、そちらの方ではないかと思った位です。

18才でローターアクトの創立に参加させて頂いて、二十数年が過ぎ、私も経験不足と云う言い訳ができない年令になって参りました。私にとって、ローターアクトで活動できたことが、何よりも自分を成長させてくれた気がします。山田さんやロータリアンの皆様に心から感謝申しあげると共に、山田さんの御冥福をお祈り申しあげます。

峰先生と私達RACとの出会い

東京千代田ローターアクトクラブ

OB 甲斐志権

此の数日、峰英二先生との思い出を考えたり、東京千代田RAC創立十周年記念誌を読んだりして、あっそうだ、あの時も一緒だったと色々と思い付く所はさすがだなーと思ってしまいました。そしてその時々情景が思いだされ懐かしさでいっぱいです。

私は先生との出会いは1976年度にRAC委員に先生がなられ、私たちの例会に出席されてからと思っていたのですが、厳密に言えば私が1973年度にRACの会長に就任した時、麴町RCの例会に出席しロータリアンの皆様の前でご挨拶した時かなと考えたりもしました。それ以後親しくさせて頂き、1978年夏、私事ではありましたが、スキューバダイビングスクールに入会する時に、健康診断書が必要だったので峰先生にお願いして九段坂病院に出向き、先生に診察して頂きました。まあ、アクターで先生に診察してもらったのは私ぐらいでしょう。その時の先生との会話のやりとりは『岑君、何処か悪い所があるのかい』『いいえ、ありません』『じゃあ健康体だよ、所でローターアクトはどう、うまくいってるかい』と聞かれました。たいした眼力で参りました。誠に名医ですね。

峰先生はアクトの例会だけでなく幅広く私たちの行事に(例えば沖縄での年次大会、第252地区との仙台、気仙沼等々での交歓会)参加され、

在京だけでなく他地区のローターアクトクラブからも知られ、慕われていました。思うにローターアクトの誰れもが知っているロータリアンと言える人はそう多くなく、峰先生は広く他クラブのアクターにも知れ渡っていたと言う事は、それだけ積極的に私たちと行動を共にしていたからだと思います。

又、参加すると同時によく発言され、協力的で強力な味方でもありました。私たちに取って大変都合の良いロータリアンでした。だから余計に私たちは峰先生に好意的で甘えっぱなしの好ましい(?)相互関係でした。峰先生は私によく言っていました。『岑君、ローターアクトはいいね、年齢制限が無ければ私もアクターに成りたいね』と。私自身も28歳を過ぎていてOBに成っていましたので一層の事、年齢制限を無くして、私共々アクターになって欲しかったのです。

私が小さな中華料理店を始めて、半年位たった初夏の日曜日の午後一時頃、前触れもなく店に入ってきて来て、

「岑君来たよ、おいしい料理を食べさせてくれない！ でも最近たくさん食べられないから娘も一緒に連れてきたから」と言って、若い女性を伴って笑っていました。

本当に優しいお言葉ありがとうございました。

本当に優しい心遣いありがとうございました。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

峰先生を偲んで

東京千代田RAC

OB 武山玲子

泉ロータリークラブの本郷先生からのご紹介で、初めて峰先生にお目にかかったのは1980年のことでした。仙台に生まれ育ち、当時四谷に勤務していた私は、千代田ロータクトに仲間入りさせていただくことになり、峰先生は入会する前の私に、峰先生と本郷先生のご親交、そしてお二人を通じての各RACの交流について、色々とお話しして下さいました。

初めてお会いして緊張ぎみの私を峰先生はユーモアたっぷりのお話で、すぐ和ませて下さいました。特に千代田RACの皆様のことを話される時の峰先生は、まるで自分の宝物を自慢されているような、慈しみ、愛情にあふれる表情で、先生ご自身の優しいお人柄を、私はそれにより感じ取りました。

その後千代田RAC入会後もアクトの活動を通して先生に何度もお目にかかれる機会を得ましたことは、とても幸運であったと思います。ロータリアンで、目上の方であるにもかかわらず、先生はいつも気さくに、まるで私達アクトの一員のようにとけ込まれ、又その一方では、私達の相談に的確なアドバイスを与えて下さり、文字通り導いて下さいました。私達は峰先生との触れ合いを通じて、人間として、大人として成長することを学んだと言っても過言ではないと思います。

峰先生にはとても多くのことを教えて頂きました。と言っても、先生

がお説教じみたことをなされたという記憶はありません。その笑顔を拝見したり、短い雑談を交わさせていただきただけで、千金に値するようなご自分の人生観をさりげなく私達に伝える事ができる。峰先生は、そんな方だったと思います。

例えばある時、確かRACで国立市の『神の国寮』を訪れた時だったと思いますが、移動中の雑談で私は先生に、「先生、私はこれまで、自分には運動神経がないものと思っていましたが、最近アイススケートを始めました。スケートはたのしいのですが、どうもスケート靴が重くて、持ち運びで肩がこりそうで時々おっくうになってしまいます。」と、怠け者でめんどくさがり屋なことを、冗談を交えながら告白しました。先生が笑いながら「まだ若いのに何言ってるんだ。僕はこの年齢で、今だにスケート靴どころか、アイスホッケーの道具一式を肩にかついで、どこへでも出かけてプレーしているよ。」とおっしゃったのには驚かされました。

就職2年目で、都会の一人暮らしや、仕事の多忙さにやや圧倒されぎみだったその時の私にとって、医師としてのお仕事、ロータリアンとしての活動に追われる先生に、どこからそんなエネルギーが来るのかは、まさに謎でした。それに確か先生は他にも多くの趣味があって、音楽だってプロ級のはず。—先生はやっぱり、スーパーマンのような方だ。先生はすごい。—と、ただただ、感心させられたのでした。

そのうち私は、先生のすごさは、全ての事に興味を持ち、熱心に追い求めるところから生まれていることに気づいたのです。人間として、大人として、自分の役割を果しながら、しかも自分にとって魅力的な物（例えば後輩の指導、奉仕活動、様々な趣味等）にも常に真摯に向き合い、決してエネルギーを惜しまない。先生のきらめきは、そんな強さにより

支えられたもの。きっと先生は、人生が与えうる魅力的な一瞬一瞬を大切に、愛する方なのだ自分なりに解釈させていただくようになりました。そして今思えば、そういうひたむきさを内に秘めた方だったからこそ、赤の他人の生意気な小娘や、未熟な若者の私達に、あれほど優しく惜しみなく接して下さることができたのかしらと、改めてその生きざまの素晴らしさに深く敬服させられてしまいます。

あんなに輝いていらした峰先生が、この世にいらっしゃらないのは、何年も過ぎた今でもとても信じがたいことです。今も時々私は両親と、峰先生がたまたま会合で仙台へお越しの際、わが家へお立ち寄り下さった時の事を思い起こしております。その時先生は、母の手作りの田舎料理を「おいしい、おいしい」と召し上がって下さり、初対面の両親とも色々なお話がはずみました。一度お会いしただけで、人の心を和ませ、そのお人柄の鮮明な印象を残される先生は、人との出会いを大切に、人生を愛する魅力あふれる方だったと思います。

私はと言えば相変わらず甘えん坊のオフィスレディとして中途半端な人生を歩んでいます。それでも趣味のスケートだけは、進歩がないながらも十年余も続けることができました。ストレスなるものに負けそうな時も、この趣味のおかげでなんとか頑張れるにつけましても、峰先生のような方にお会いできた自分の人生の幸運さを思わずにはいられません。好きな事、好きな物に一生懸命になれる瞬間。その一瞬一瞬それ自身が、『幸せ』というものだということに気づかせて下さった峰先生には、改めて感謝の気持ちに絶えません。